

## 第9回 藤枝市認知症とともに生きる共創のまちづくり委員会 議事録

■日時：令和8年5月21日（木）午後2時00分～午後3時30分

■場所：藤枝市役所 西館5階 大会議室

■委員出席者：

堂園委員長、山崎副委員長、長谷部委員、杉山委員、金子委員、中村委員、塚本委員、森田委員、内山様（代理）、長谷川様（代理）、前田委員、亀澤委員、嵐口委員、芦澤委員、小沼委員、内村委員

### 1. 開会

### 2. 健康福祉部長あいさつ

昨年は、委員の皆様の多大なるご尽力により、「藤枝市認知症とともに生きる共創のまちづくり計画」を県内で初めて策定・施行することができた。改めて感謝申し上げる。

今年度は、真に「安心して認知症とともに生きることができるまち」を実現するための「実践の年」となる。

本計画の柱である「希望ある認知症観の普及と理解の深化」「一人一人の個性と力を生かした社会参加の促進」「安心して思いを伝えられる環境づくりの推進」の具体化に向け、皆様の専門的な立場から、率直かつ前向きなご意見をいただきたい。

### 3. 自己紹介

・名簿の順番に自己紹介

### 4. 委員長、副委員長の選出

事務局：委員会規則の第4条2項のとおり、委員長は委員の互選により選出することとなっている。立候補、推薦等はあるか。

委員：静岡大学の堂園委員にお願いしたい。

事務局：堂園委員に委員長のご推薦があったが、いかがか。

(拍手)

それでは、堂園委員にお願いする。次に、規則第4条3項に基づき、委員長から副委員長のご指名をお願いする。

委員長：昨年度に引き続き、志太医師会山崎委員に副委員長をお願いしたい。

(拍手)

では、山崎委員をお願いする。

事務局：本日は16人が出席しており、藤枝市認知症とともに生きる共創のまちづくり委

員会規則第5条第2項の規定により、半数以上の出席を得ているため、会議の開催が成立したことを報告する。

## 5. 議事

### (1) 第10次ふじえだ介護・福祉ぶらん21の調査結果について

委員長：議事(1)について、事務局から説明をお願いします。

事務局：介護・福祉ぶらんは国の方針や地域の実情を踏まえ、3年ごとに見直しを行うこととされている。今年度は第9次計画の最終年度であり、来年度からスタートする第10次計画策定の年となる。

計画策定にあたり実施した、第10次ふじえだ介護・福祉ぶらん21策定に係るアンケート調査結果について、認知症部分を抜粋して報告する。

本調査は、認知症とともに生きる共創のまちづくり計画の指標ともなるため、計画の重点目標と指標を確認する。資料1参照。

重点目標1「希望ある認知症観の普及と理解の深化」、重点目標2「一人一人の個性と力を生かした社会参加の促進」、重点目標3「安心して思いを伝えられる環境づくりの推進」、それぞれの達成状況をはかるため、目標ごとに指標を定めている。

重点目標1「希望ある認知症観の普及と理解の深化」の目標の指標として、「認知症になってからも希望を持って自分らしく暮らし続けることができると思う人の割合」を挙げている。

資料1-2、P6.「(4)あなたは認知症になってからも地域で仲間とつながりながら希望を持って暮らし続けることができますか」という質問に対し、一般高齢者では肯定的な回答が15.9%、要支援認定者では、肯定的な回答が17.8%。この「希望を持って暮らし続けることができますか」という質問と、P7.「(5)あなたは認知症についてどのような印象や考えをお持ちですか」という質問について、クロス集計をもとに考えていくことが良いのではないかという意見をいただいたため、資料1-3にその結果がある。

クロス集計結果としては、「認知症になってからも地域で仲間とつながりながら希望を持って暮らし続けることができる」と回答した人ほど、認知症に対する印象も前向きに捉えている傾向がうかがえた。

重点目標2「一人一人の個性と力を生かした社会参加の促進」の指標として「認知症の人が外出や買い物、地域活動など自分のやりたいことを実現できていると思う人の割合」を挙げている。

資料1-2、P9.「あなたの住む地域では、認知症の人が外出や買い物、地域活動

など自分のやりたいことを実現できていると思いますか」という質問に対して、一般高齢者では肯定的な回答が 9.3%。要支援認定者では、肯定的な回答が 11.7%。

重点目標3「安心して思いを伝えられる環境づくりの推進」の指標として、「自分が認知症になったとき、身近な人に気持ちを伝えられると思う人の割合」を挙げている。

資料1-2、P10.「(7) あなた自身が認知症になったとき、認知症であることや自分の思いを、身近な人に伝えられると思いますか」という質問に対して、一般高齢者では、肯定的な回答が 52.1%。要支援認定者では、肯定的な回答が 49% だった。「(7)認知症であることや自分の思いを身近な人に伝えられると思うか」、「(8) 伝えたいと思う相手」のクロス集計の結果が、資料1-3、P2.である。認知症になったとき、自分の思いを身近な人に伝えられると回答した人は、子ども、兄弟、家族以外にも、友人や知人、地域の仲間、コミュニティを挙げる割合が高く、伝えられる範囲が広い傾向にあることがわかった。

資料1-2、P13.意思決定支援について、ケアマネジャーを対象とした調査結果を報告する。ケアマネジャーが、認知症のある利用者に対して、日常的にどのような意思決定支援を行っているかを把握する内容の質問である。「①利用者がどのような暮らしをしたいか、暮らしの意向を確認している」という問いに対して、「ある程度行っている」が 64%で「常に行っている」が 21.8%。

「②利用者の認知機能に応じて、理解しやすい言葉や方法で説明している」についても「ある程度行っている」が 49.5%、「常に行っている」が 41.1%。

「③利用者が言葉で表現しにくい場合、表情や身振りなどから意思を読み取るようにしている」については、「常に行っている」が 48.6%、「ある程度行っている」が 46.8%。

「④利用者の意思を担当者会議などで他職種と共有している」と「⑤の利用者の意思が確認しづらい場合には、家族や身近な人からの、本人の推定意思を確認している」「⑥意思決定支援に関する学習会や研修会に参加している」については、それぞれ「ある程度行っている」が最も多いという結果であった。

アンケート調査の報告については以上となる。

委員長：アウトカム指標の達成目標については、どのように設定していくか。

事務局：1期目の計画であり、比較できる基準やデータがないため、本計画の中でどこまで数値を上げていくのが適切なのか、目標値の設定や根拠について、検討を行い、次回委員会でお示ししたい。

委員長：資料1-2のケアマネジャー調査結果の報告について、説明いただいた背景を知りたい。

事務局：重点目標3「安心して思いを伝えられる環境づくりの推進」に関連すると考えている。ケアマネジャーは、ケアプラン作成に携わり、本人の声を聞き、その意思決定を支援していくことに関わってくる職種であるため、報告させていただいた。

委員長：重点目標を3つ掲げていて、それぞれの重点目標が達成されたかどうかを見るための指標になる。そのため、目標値を設定し、そこに近づくための取組を進めていくことになる。現状は、目標値はまだ定まっておらず、現状を把握した上で、実現可能で尚且つ望ましい目標をこれから設定してこうという段階である。  
続いて、2つ目の議事「令和8年度の計画に基づく取組」について説明をお願いする。その後、まとめて意見をいただきたい。

## (2)令和8年度の計画に基づく取組について

事務局：資料2-1 令和8年度認知症とともに生きる共創のまちづくり計画に基づく取組について説明する。重点目標1「希望ある認知症観の普及と理解の深化」では、前回委員会の意見を基に、地域に出向いた形での普及啓発の実施を進めていきたい。重点目標2「一人一人の個性と力を生かした社会参加の促進」では、部会を設置し、社会参加・バリアフリーについて検討を進めていきたい。具体的には、安心して買い物ができる環境づくりに向けた取組として、普段の買い物について感じていることや工夫について本人と事業者と意見交換を予定している。杏林堂薬局と一緒に取組むことを企画しており取組の内容や効果について、部会の中で報告や意見交換ができればと考えている。

重点目標3「安心して思いを伝えられる環境づくりの推進」でも部会を設置し、意思決定支援について検討を進めていきたい。医療介護連携推進事業の中では地域包括支援センターが意思決定支援についての普及啓発の取組を予定している。また、意思決定支援に関連し、個別支援の実践では、地域ケア会議等を通し、多様な立場の人と意思決定支援の理解を深め、個別支援につながる取組を進めていきたいと考えている。具体的な内容や進め方について意見を伺いたい。

また意思決定支援について介護福祉士の研修も7月、9月に企画をしている。その他、安心安全な外出に向けた取組として、市役所内での連携や、早期の段階での個別支援を進めていくことを予定している。

委員長：地域包括支援センターで意思決定支援に関して、市民向けに予防普及啓発事業を実施予定ということだが詳しく教えていただきたい。

委員：自分の意見を伝えることがとても大事であり、「伝えられなくなる前に、自分は  
どう暮らしていきたいのか伝えていこう」ということをふれあいサロンや老人  
クラブなどの団体向けに普及啓発していこうと考えている。

日常生活ではあらゆることを決める様々な場面がある。それについて振り返っ  
てもらおう。例えば、お出かけにどんな服を着ようか、今日はあれが食べたい、ど  
どこに行きたい、人の役に立つことをしたいなど全て自分の意思で決めている。地  
域の元気な高齢者に向け、「早めから自分の気持ちを伝えていこう」という視点  
が一つ。もう一つは、高齢になるとさまざまなことを諦めてしまうが、したいこ  
と、できること、やってみたいことを大事にしませんかという視点。認知症に限  
らずに自分の人生をどう考えるかについて、市民の皆さんに伝える取組をして  
いきたい。

委員：介護福祉士会では、研修を2回予定。1回目は7月22日19時から生涯学習セ  
ンターで開催。藤枝市内に勤めている介護職員が対象。介護福祉士資格を持って  
現場で働く職員は、「地域」という意識が低い。どうしても事業所の中の仕事、  
施設の中での認知症の対応で終わってしまっている。いろんな職能人が集まれ  
ば知識が広がり、地域に貢献できるのではないか。9月10日に関しては、19  
時から生涯学習センターで若年性認知症の当事者である丹野さんを講師に招き、  
地域で働く医療介護従事者を対象に、当事者の声からともに創る暮らしをテー  
マに学び合う。

自分自身この委員会に出席するまで自分の中の認知症のケアは、いかに安心安  
全に、不穏にさせないか、ということだった。当事者の話を聞いたり地域の取組  
を聞き、仕事をする上で安心安全や不穏にさせないのは大切だが、その前にその  
人の尊厳やその人のやりたいことを考えた上で、普段のケアをしないとイケな  
いと感じている。こういった研修を通じて、藤枝市内の介護職が地域に目を向け  
て、認知症の人とかかわることができる環境を目指したい。

委員：意思決定について普及啓発を進めることが、将来認知症になったときにどのよう  
に生かされるのかということが、頭の中でうまく繋がってないので、今後部会に  
参加させていただき考えていきたい。

委員長：来自分の認知機能が衰えたことを想定して、いろいろ意思決定支援をする、し  
てもらおうというときにしばしば言われるのが人生会議やアドバンス・ケア・プラ  
ンニング。自分の人生について医療従事者だけでなく身近な方とも、医療やケ

アだけのことでなく、自分がどこでどういうものを買って食べて、などいろいろなことを話し合っ、可能であれば文章に残しておくことが、意思決定支援の形の一つ。ただ自分の死が迫っている人ほど、考えることが難しい。そのため、そういったことを話せるような関係づくりを考えるということも意思決定支援の部会でできるかもしれない。あとは実際文章に残しても、本当に尊重されるのかというところの難しさもある。家族の思いが変わって、違った方向でいろいろ決めてほしいということになる場合もある。意思決定支援には課題が多い。

事務局：重点目標3、指標の「自分が認知症になったとき、身近な人に気持ちを伝えられると思う人の割合」で一般高齢者が52.1%、要支援認定者は49.0%であり、一般高齢者よりも要支援者の方が低い。他の指標では要支援者の方が高いため、気になる点でもある。伝えることにバリアを感じている現状があるのか。また、誰に伝えたいかでは子どもという割合が非常に高い。実際に家族内で話し合う機会があるか、きっかけをどう作るか、難しさが数値にも影響しているのか。要支援認定者では2番目に医療や福祉の専門家が高い。それらも重要な役割を担っていることが明らかだが、家族の中で日頃から自然に話し合いが行われるようなまちの姿も望ましい。

委員：要支援者のみならず、今市内には独居世帯、高齢者世帯が多い。

子どもにはあまり頼りたくない、話もしてない、迷惑をかけたくないと思っている人が多い。突然、意思の確認が必要になったときに、関係者は、家族に確認する人が多い。日頃話していなければ、本人がどう暮らしたいのか、どういう思いで生活したいのか見えにくい現状がある。一人暮らし、身寄りのない人たちが意思をきちんと伝える場面がどこなのかが重要になる。

また要支援認定者のケアプランを見てみると、目標に掲げることが方法（サービス）や身体機能等に注目する場合が多く、どのように生活したいのか、何を食いたいのか、どこに行きたいのか、というような生活上の目標が出てこない傾向がある。

本人が本人らしく生きていくための発信をして良いのだという取組が必要。元気な頃から意思を聞き、介護度が重くなっても、本人の思いがリレーされていくような暮らしの支援で見えていけると良い。

意思決定支援の実践に向けた個別支援では、福祉職としては生活の視点や権利擁護の視点に重きを置きがちになってしまう。地域の方、医療の専門家、介護の専門家、民生委員、様々な人と意見交換をすると、色々な違う視点があるため、実際の地域の課題も出てくる。個別の事例を落とし込みながら検討していくと

見えてくるものがあるのではないか。

委員長：認知症の人にどのように自分の人生観や価値観を語ってもらうか考えていく立場の自分たちは、自分の価値観や大切にしているものについて、どれくらい意識できているのか、語っているのか。

自分たちがやってないことを、高齢者に求めているというアンバランスさがある。実際やろうと思ったら難しく、難しいことを相手に求めていることになる。自分たちが一体何を大事にしているのか、一度考えてみるという点では、もしバナゲームというツールもある。それは自分の大切にしているものを、自分で語るような仕組みになっており、ゲームを通じて自分たち自身のことを考えてみるというのも一つのきっかけになると思う。

委員：治療が必要で入院する高齢者、認知症の人がいる中で、治療方針を決めていくにあたり、本人の意思が汲まれていないことが多い。本人抜きで家族に今の病状や今後の治療方針を説明して家族同意のもとで治療を始めることもある。本人の意思が汲みとられていないことを日々感じている。急性期病院ということもありどのように本人の意思を、汲み取れるか悩んでいる。家族が中心になり、本人の意思が尊重されていない現状がある。

病状が重く重症化して意識が朦朧としている方に対しても、本人が元気なときに関わっている人に、「本人はどんなことを言っていましたか」「本人はどういう方でしたか」「どんなことが好きでしたか」などなるべく本人の様子を聞きながら、家族や本人の思いを引き出すような問いかけをしたい。

患者を主としたケアを進めていきたいとスタッフ同士で話をするが、なかなか本人の思いが汲み取れず、周りの意見や考え方で決められてしまっている現状がある。本人に話を聞いていくと、実は思いがあったり、それを家族に伝えられていないことが多い。いつどのように確認していくかすごく難しいが、本人がどういう生活をしてきてどういう趣味でとかそういった話もし、本人の思いを引き出していくというのも一つの策としてはあると思う。具体的にどのように進めていくかというとなしきがある。

副委員長：自分が認知症になることを考えていない人も多くいる。認知症になり外に出る機会が減り、認知症の人がどのように生活しているかなど触れる機会が少ない。ケアプランでは、その人が活動や傘下につながるプランを立て、認知症の人が地域で生活できているということを見ることができるよう発信をしていくと良いのではないか。

年をとった時、どのように暮らしたいかあまり考えていない人も多い。医師会で、「自分らしい最期を考える集い」というものを行っている。一般の人を対象に、訪問診療のこと、生活のこと、支援のことなど色々なケースを出して話をしている。これから 100 歳まで生きるとして、どのようなことを重視して生きていきたいか、あるいは死ぬときに大事にしたいと思うことをカードを使い、優先順位をつけるゲームなどを行う。こういった集いを地域で地道にやるというのも有効ではないか。

委員：ケアプランについて、本人の意思、意向が介護度が高くなるにつれておきざりになる傾向が感じられる。

本人の意思や家族の思いを確認することができるのがケアマネジャーの特権でもある。いろんな話をさせていただきながら、聞いたことを生かして、その方がより望む生活ができるよう目指したい。その方がやってきたことをこの地域で続けられる計画を作っていくことが理想。ただそこに意識を向けられるケアマネジャーばかりではない現状がある。やはり団体としてそういった意識を多くのケアマネジャーに持っていただく必要があるため、発信していかななくてはならない。

委員：グループホーム入居の際に、本人がどのように生活したいか、家族にどのように生活してほしいかを聞くことを大事にしている。自宅で過ごしたいという思いがある中でも、グループホームで幸せに暮らしていただくためにどうしたらいいのか職員で話をしている。入居している方には、思いを自分の言葉で上手く伝えられない方も多い。そのため、元気なうちにこうしたい、というのを自分で考えたり話す機会があると良い。

委員：「認知症になってからも希望を持って自分らしく暮らし続けることができる」ということが一つの指標だが、希望をもてない現状もある。

ケアマネが月 1 回来ると、本人はこうしたい、あれがしたいなどたくさん話している。輪笑に参加し、本人が思いを話す場面もある。この指標の目標数値を上げられるのは、本人にとって身近なケアマネであったり行政であったり、家族会等の環境が大きく影響すると思う。家族がいるのに家族に言えない人もいる。

女性の介護者は、相談相手も友達もおり、情報が入りやすい。男性の場合、相談相手がなかなかいないように感じる。

ケアマネなど周りの人が家族を支えることで、共に本人の希望を達成していけるのではないかと考える。

委員長：社会参加・バリアフリーの取組についても何かご意見があれば伺いたい。

代理：認知症になるとなかなか外に出なくなるという話があった。

生活インフラを支えるドラッグストアやスーパーマーケット、コンビニにとって地域の方が気軽に買い物できる環境づくりは、企業としての課題であると考えている。反省点の一つとしては商品一つ販売することにも買い手目線ではなく売り手目線になることが多い。買い手の立場に立つことで買っていただきやすくなる。

認知症の人と家族が希望することをしっかりと確認して対応できるともっと使っていただけのような環境になるのではないか。従業員側としても、意識を高く持つと、協力できることが出てくるのではないかと思う。

委員：個性と力を生かした社会参加について、畑で野菜の収穫や植付けを本人に手伝ってもらっている。作業しながら本人と会話をすると、本音が聞ける。一緒に何かすることは、これから認知症の方と一緒に暮らしやすいまちをつくる上で、ヒントになる非常に良い話が聞けることにつながるのではないか。

委員：昔からこの地域に住んでいる。子どもの朝の登校の見回りをしている。こどもたちからの「おはよう」この声で目覚める。寝る前にやろうと思っていたことが「ああそうか」と思い出し元気をもらっている。

町内の人にも自分のことについて話をしている。自分から、現状を伝えることは大事なこと。いろいろなところに行くと、本人も家族も隠したがらる。自分の思いを話せるよう背中を押してくれる環境があることが大切。自分のことを知ってもらうことが重要だと思う。この委員会に参画することも家族に話してきた。自分が今どこにいるのだろうか、これからどうしていこうかということを書き留めている。それを町内の方にも伝えている。

委員会内だけでなく、認知症のフォーラムなどで本人が語り合う場を設け、コミュニケーションをとることが大切。誰でも認知症になる可能性があるということを知ってもらう。今日の資料を家族に見せ、こういう状況であることを知ってもらい、話し合いたいと思う。

委員長：委員の話から、重点目標3「安心して思いを伝えられる環境づくりの推進」と重点目標2「一人一人の個性と力を生かした社会参加の促進」は結び付いていることが改めて実感できた。

委員：地域の支え合いによる買い物支援をしている。買い物はチケット制だが、チケットの番号を順番に出していくことが難しい人もいる。今はボランティアが対応しているが、認知症が進行した場合の対応が難しくなってくる。要支援2までは利用できるが、要介護になると利用できないことになっている。

買い物の間はすごく楽しい。車の中で色々な話をすることもできる。会話の内容を考えてくるのに、テレビを見てくるという人もいる。

買い物支援についての対象は65歳以上で、基本的には1人で車に乗って買い物できる人という条件。関わる中で、心配な方が出てきたら地域包括支援センターに相談している。

委員：静鉄グループの中に、老人ホーム、通所介護や介護付アパートがあり、利用されている方々向けにお買い物タクシーや移動販売を行った。良かれと思って始めたが、移動販売については、スーパーに行って物を選ぶ楽しみを得たい、お買い物タクシーでは、一緒に買い物に行く人に何を買っているのか見られてしまうことが嫌という声が聞かれた。こういう声は一部かもしれないが要因を特定していく必要がある。アウトカム指標に割合を掲げているが、これが目的変数と言われるもの。これを構成している説明変数というものがある。例えば「認知症になってからも希望を持って自分らしく暮らし続けることができると思う人の割合」は家族以外の会話で高まる、自分のことを他者に知ってもらおうとプラスに作用するのではないかなど。これらの説明変数を把握していくと、上がる要素の部分に的を絞った取組ができる。今後、ヒアリング等から説明変数となりうる内容をいくつかピックアップして回答に対して「なぜそう思ったか」の理由まで把握していくことで分析がしやすくなる。

委員長：どういう要素が影響しているか分析できると良い。実際どこまで出来るのかバランスをとりながら進めていけると良い。

委員：行方不明等による保護があったとき、本人は家族へ連絡することをやめてほしいと言うことが多い。家族には迷惑をかけたくないという思いがある。ケアマネに連絡してほしいと言う方もいる。本日の皆さんの意見を聞き、背景が理解できた。今日様々な取組を知れたので良い機会だった。

代理：買い物を続けられるための環境づくりに取り組んでいきたい。認知症の人に対し柔軟に対応できるような、店舗、体制を整える必要がある。何かあったときに地

域包括支援センターなど連携できるところに連絡が行く仕組みを作ってはいるが、職員全員が認識してすぐ対応できるような体制を作っていきたい。

委員長：さまざまな課題もある中で、全てのことを一遍に行うのは難しいが、クリエイティブな発想で解決できることもあり、多くの人がいればそれだけ知恵も集まる。協働して考えていきたい。本日の意見を参考に具体的な取組につなげてもらいたい。

本日の議事は終了となるため、ここで司会を事務局に戻す。

事務局：今後の予定について。名簿の部会の欄が①の方は、社会参加・バリアフリーの部会、②の方は意思決定支援の部会に参加をお願いしたい。部会①については、8月頃、部会②については7月頃を予定している。

全体会については、第10回委員会を令和8年9月16日水曜日10時から予定している。その後部会を行い、今年度最終の第11回全体会議という形で計画している。